

遊戯三昧

石井 裕

日曜日の朝、こころの時代という番組を時折視る。遊戯三昧という語は仏典の中にみえユゲサンマイと読む。

子どもが遊んでいる様子を見ると遊びに熱中し、無心の状態で遊びの世界に浸りこんでいる。そういう姿を遊戯三昧ということであった。

三昧という語を字源で調べると、物事に心を専一にする義とある。私が書三昧の境地に遊べるのは、古人の名蹟の手習をしている時である。

先日、はからずも知人の一人が喜びを満面にうかべて、佐藤先生のご立派な作品を頒けていただいたと聞かせてくれた。その作品は半紙に「遊戯三昧」と書かれてあるという。

その話を聞いて、先生も遊戯三昧という語に心を動かされたにちがいないと思った。私は、先生から直接お話を伺いたいと思い、日ならずして先生のお宅に伺った。

早速、遊戯三昧のご作品について伺うと、お手許にあった玉作二点を出してくださった。

「遊戯」と二字を半紙に横書きされてある。先生の玉作を拝見して、もう一つつきりしないものかと心の中でつぶやいた。勿論容易に書ける作ではないが先生ならばもう一つ高い境地でまとめることができるだろうと思っただけである。

一枚は遊の筆の活躍に対し戯が落着かない。他の一枚は、戯が立派で遊がや、軽い感がある。

半紙一枚に「遊戯」の二字を書いて遊・戯が共に響きあつて紙面をびたりと押えないうと優れた作品にはならない。書とはそういうむずかしさをもっている。一筆勝負でやり直しがきかない。心と筆がびたりと一致しないと紙面を押えることができないのである。

先生は永年に亘つて古名蹟について研鑽に研鑽を重ねられ書に心血を注がれているご立派な方である。先生にも矢張りもう一つ得心のいかぬ点がありであつたのではなからうか。

それから大分経つてご挨拶に伺う用事があり先生をお訪ねした。書齋しよさいの額に「遊戯」の二字を書かれたご作品が入れたあつた。洵に立派で紙面にしつかり落着いた非のうちどころのないものであつた。

前述したように先生には更にご自分の納得のいく作品をという気持があつたのあろうと推測しているのである。

「注」 佐藤先生―前文教大学女子短大文芸科講師 書道担当